

大品山遭難(2007年3月21日)

- 1:45 1229mの標高点右側を巻くようにして進むと下りすぎたと感じ、進路を西向きに変え、登り返す。
- 2:20 再び下るが、コンパスの角度が違い、GPSもずれている気がする。議論の間にパーティがバラけた。
- 3:15 時間が経過するばかりでまずいと現状のままのルートを選択してSLの後を追った。
- 4:30 ロープを出す所が多くなり、時間がかかる。最終的にビバーク地点となる崖に遭遇。
- 6:00 下降をあきらめ、より安全な場所への登り返しも不可能と判断しビバークを決意する。



解説

1229m標高点は、小ピークで現地確認が比較的容易にできる。ここをアタックポイントとする。この地点で行う手続き(オリエンテーリング用語で予測を行うこと。)は、

①コンパスで進行方向を確認する。②次の目的地点を傾斜転換点(急な下りから緩やかな尾根へ角度が変わる地点)とする。③そこまでの距離は、約〇〇mだ。④そこまでの標高差は230mだ。⑤そこには調整池があり、大きな特徴物となっている。

というように複数の予測を立てる。予測を立てて初めて行動に移るのだ。

行動中は、①コンパスで進行方向がずれていないか、標高差が約200m以上下っても調整池が出てこないと迷っている。急な下りから尾根が平にならないと道に迷っている。ザイルを出すほどの急斜面は、正解ルートには出てこない。というように自問自答が必要である。また、これと同時にコンパスを信じる技術も必要である。

今回、①チームがバラけた②道に迷っていると声が上がった時に時間をかけて現在位置の把握ができなかった③計画より行動が遅れていた焦りも心理的要因と思われる。